

スポーツ指導における指導者の体罰問題に関する一考察

A consideration about the problem of a coach's corporal punishment in sport instruction

1K08B216-9 安川真璃子

指導教員 主査 吉永武史先生 副査 友添秀則先生

【序章】

近年、学校の教師や運動部活動の指導者による生徒や選手への「体罰」による事件、ニュースがあとを絶たない。テレビでは取り上げられていないような体罰事件であっても、各地方紙に掲載されている事件などを踏まえると、数え切れないほどの体罰事件が日々報じられていることがわかる。

今日の教育現場では、教育場面での暴力行為を指導の一環として捉え、暴力を用いて指導にあたっている教育者は少なからず存在する。特にスポーツ場面では、日々の練習の中で、体罰が当たり前のように行われていることが多い。これらの指導者は体罰を「愛のムチ」として選手育成のためと自らを正当化しようとするのである。

私は今まで14年間ソフトテニスが続けてきた。競技生活の中では、多くの指導者と出会い、様々な指導を受けてきた経験がある。その中で、時には指導者から怒鳴られ、殴られたこともある。

そこで私は、勝利至上主義でのクラブ活動、いわゆる「スポーツ指導」における体罰問題について考えた。私が経験したように、強豪チームや強豪校になればなるほど体罰は目立っている。そして、体罰禁止の声が飛び交う中、体罰問題があとを絶たない今日のスポーツ指導の現状を捉え、課題を明確にしていきたいと考えた。

そこで、本研究では特に「スポーツ指導」に着目し、体罰を行う側、逆に体罰を受ける側などのあらゆる観点から体罰問題を考えていく。それと同時に、スポーツ指導においての勝利至上主義の延長に体罰問題が存在するのであれば、今後のスポーツ指導には具体的にどのような課題があるのかを明らかにした。

【第1章】

第1章では、体罰問題は、指導者のパーソナリティーが大きく関与してくるため、指導者の資質能力について考察していく。そもそも指導の最終手段が殴るという暴力行為に結びついてしまうのは、指導者の指導力のなさに繋がってくるものである。そこで、スポーツ指導者に求められる資質能力を追究し、理想の指導者に近づけた

めの指導者の役割を検討した。

【第2章】

第2章では、体罰の定義を述べたうえで、今日の体罰問題の現状を明らかにしていく。また、実際に起こっている体罰に伴う処分がどのようになっているのか知り、そこから体罰が根強く残る原因を見出すよう試みた。そして、実際に体罰を受ける側である、選手や生徒の体罰への捉え方や体罰が彼らに与える影響について考察していった。

【第3章】

第3章では、スポーツと暴力をテーマとし、スポーツ指導における暴力あるいは、体罰と並行にして語られることが多い家庭教育での「しつけ」について考察していく。今日、体罰問題を考えるにあたり大切なことは、体罰撲滅の考えを進めるためには、体罰が教育の世界からなくなならない背景を受け入れる必要がある。そこで体罰を肯定的に捉え、是論を述べることによって体罰問題に至る経緯を考察し、今後の課題へとつなげる。

【結章】

これまでに述べてきたスポーツ指導における体罰問題について総括していく。体罰を考えるにあたって、体罰撲滅を望むのであれば、体罰が教育現場からなくなならないという事実を受け入れなければならないということである。

体罰問題における最大の課題は、やはり指導者のスポーツ指導に対する正しい知識と指導体制に問題がある。指導者の行き過ぎた勝利至上主義や体罰、チーム内における極端な上下関係や不必要な伝統がスポーツ指導の場や運動部活動に存在している限り、本来の意義を果たすことは困難である。

いかなる状況であっても、最も優先されるべきことは選手が積極的にスポーツを楽しみ、勝つ喜び、ならびに負ける悔しさを味わうことのできる環境を作ることである。そして、この環境こそが、競技スポーツにおける教育的意義を最大限に生かすことができるスポーツ指導のあるべき姿ではないかと考える。